

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01180

研究課題名（和文）転換期を迎えたフランス系カナダのローカル化かつハイブリッド化するアイデンティティ

研究課題名（英文）French Canada in transition: Its localized and hybridized identity

研究代表者

大石 太郎 (Oishi, Taro)

関西学院大学・国際学部・教授

研究者番号：70433092

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は転換期を迎えているフランス系カナダにおけるアイデンティティのローカル化とハイブリッド化を現地調査に基づいて明らかにすることを目的とした。なかでも、沿海諸州のフランス語系住民アカディアンが1994年以降5年ごとに実施している世界アカディアン会議に注目した。第6回世界アカディアン会議は2019年8月にニューブランズウィック州南東部およびプリンスエドワードアイランド州をホスト地域として開催された。近年の世界アカディアン会議はホスト地域を展示する役割を果たしており、北アメリカ各地から集まるアカディアンや最近の移民が居住地の歴史や文化に親しむ機会にもなっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は転換期にあるフランス系カナダにおけるアイデンティティのローカル化とハイブリッド化を検討したものであり、歴史に根ざしたアイデンティティを継承しながらも、少子高齢化を背景に、最近流入したフランス語話者移民の統合を視野に入れた活動がみられることを明らかにした。比較的均質と考えられてきたフランス系カナダのアイデンティティに変化のきざしがみられることに注目した点に学術的な意義がある。日本においても地域の文化や伝統の継承と開かれた社会との両立が課題であり、アングロサクソン型多文化主義が受け入れられてきた地域より日本と共通する点の多いフランス系カナダの経験を明らかにした点で社会的にも意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research project, based on the author's field survey, examined the localization and hybridization of identity in French Canada. The focus was especially on the World Acadian Congress, which has been held by the Acadians in the Maritime provinces every five years since 1994. The 6th World Acadian Congress was held in southeastern New Brunswick and Prince Edward Island as host regions in August 2019. In recent years, the World Acadian Congress has played a role in exhibiting each Acadian region. It has provided an opportunity for French-speaking new immigrants and Acadians who live in other regions across North America to learn the history and culture of the regions where the congresses were being held.

研究分野：人文地理学

キーワード：アイデンティティ ローカル化 ハイブリッド化 フランス系カナダ 沿海諸州 ケベック州 博物館

1. 研究開始当初の背景

カナダではフランス語が英語と並ぶ公用語であり、フランス語を母語とする人口が全人口の2割強をしめる。その多くは東部のケベック州に集中しているものの、フランス語を母語とする人々(以下、フランス語話者)はすべての州に居住しており、一般にフランス系カナダと総称される。カナダの州で唯一フランス語を母語とする人口が多数をしめるケベック州では、1960年代以降、カナダからの分離・独立を求める動きが活発化し、1990年代に最高潮に達した。この時期、ケベック州のフランス語話者は自らをフランス語でケベック人を意味する「ケベコワ」とし、それまでのフランス系カナダ人ではなく、地域と結びついたアイデンティティを強調するようになった。ケベック州における「ケベコワ」意識の高揚を受けて、たとえばオンタリオ州のフランス語話者は「フランコ・オンタリアン」といったように、ケベック州外に居住するフランス語話者は州と結びついたアイデンティティを発達させていった。報告者はこれをフランス系カナダにおけるアイデンティティのローカル化と考えた。

しかし、ケベック州におけるカナダからの分離・独立を求める動きは2010年代に入ると急速に衰退した。人々の関心は分離・独立よりもむしろケベック州内の多文化化とそれへの対応に向けられ、多文化化が進行するなかで、ケベコワとは誰かという問いが突きつけられている。分離・独立運動がさかんになり始めた1960年代には、ケベコワが誰かというのはほとんど疑いのないものであった。すなわち、フランス植民地時代に入植した家系の末裔であり、フランス語を母語とし、実践しているかどうかは別としてカトリック的伝統を継承しているという共通する特徴が明確であった。しかも、少ない家族から発展したために、フランス系カナダでは姓に特徴があり、ケベコワか否か、フランス語を母語とするか否かは姓で判断できてしまうので、容易に区別ができた。そしてこの状況は、ケベック州外のフランス語話者の社会でも同様であった。しかし、国内外を問わず人の移動が激しさを増す現代において、フランス系カナダだけがその影響から免れることはできない。そこで都市部を中心に、最近では伝統的なフランス語話者像からはみ出す人々が目立つようになってきた。報告者はこれをフランス語話者のアイデンティティのハイブリッド化と考えた。こうした考えを背景に、本研究課題を構想した。

2. 研究の目的

本研究課題では、さまざまな点で転換期を迎えているフランス系カナダにおけるアイデンティティのローカル化とハイブリッド化を現地調査に基づいて明らかにすることを目的とした。主たる研究対象地域と考えていたのはケベック州モントリオール大都市圏とニューブランズウィック州モンクトンおよびエドマンズトンであった。モントリオール大都市圏はケベック州最大の人口を擁する都市圏であり、ムスリムや保守派のユダヤ人をはじめとする文化的・宗教的少数集団が多く居住している。したがって、ケベック州における「ケベコワ」アイデンティティのハイブリッド化の最前線となっている。同様に、ニューブランズウィック州モンクトンは同州最大の都市地域であり、フランス語話者は少数派であるが、フランス語を教授言語とする大学が立地するなどフランス語話者にとって重要な都市である。同州に居住するフランス語話者は歴史的経緯からアカディアンとよばれ、1880年代までにケベック州のフランス語話者とは異なるアイデンティティを確立した独特の集団である。ただ、そのアイデンティティが歴史的経緯に由来するだけに、同じフランス語話者であっても歴史を共有していない人々との間の境界は高かった。しかし最近では、少子化の進行や移民の増加を背景に、地域に基づくアイデンティティ、すなわち歴史を共有していない人々をも受け入れられるアイデンティティに変わりつつある。一方、ニューブランズウィック州北西端に位置するエドマンズトンはアカディアンの主流と異なる歴史を有する地域の中心都市である。しかし、2014年に第5回世界アカディアン会議が同地を中心に開催され、近年ではアカディアン・アイデンティティへの統合が進みつつある。それに加えて、第5回世界アカディアン会議はエドマンズトンを中心とするニューブランズウィック州北西部だけでなく、隣接するメイン州アールストゥーク郡北部とケベック州テミスクアータ地方との共同開催であったので、国境や州境を超えて分断されていた地域の再統合の契機となり、コロナ禍以前のこれらの地域ではそれぞれの独自性を残しながらも、さまざまな領域で協力関係が構築されつつあった。

3. 研究の方法

本研究課題では現地調査を中心に、文献や統計資料のほか、参与観察、ヒアリング調査などによって得られた資料を総合的に分析することを想定していた。そこで、初年度の2019年8月にニューブランズウィック州南東部およびプリンスエドワードアイランド州を宿主地域として開催された第6回世界アカディアン会議に際して参与観察を実施するとともに、モンクトン大学アカディア研究センターやラヴァル大学図書館において関連資料を収集した。しかし、2020年に入って新型コロナウイルスの感染拡大が深刻になり、現地調査が不可能になった。2022年度には国境を越える移動が可能になったが、対面接触をとともう調査は依然として難しい状況が続いていた。それをふまえて、2022年度はコロナ禍を経た社会の変化を考慮に入れつつ、広域

的に現状を把握することに努め、アイデンティティのローカル化やハイブリッド化にかかわるものとして博物館の展示内容に注目した現地調査を実施した。2023年度は2019年度に実施した調査の補充と今後の展開を視野に入れた資料収集を実施した。なお、現地調査が不可能であった時期も現地の新聞の電子版を購読し、現地情報のフォローに努めた。

4. 研究成果

新型コロナウイルスの感染拡大によって現地調査を実施できない期間が長期に及んだため、本研究課題の成果の中心は2019年度に調査できた第6回世界アカディアン会議の参与観察や関連資料に基づくものである。世界アカディアン会議は、アカディアンの入植400周年を10年後に控えた1994年に第1回が開催され、その後5年ごとに開催されてきた。第1回開催地はニューブランズウィック州南東部であり、第2回（1999年）はアメリカ合衆国ルイジアナ州ラファイエットを中心とする地域、第3回（2004年）は最初の入植地であるノヴァスコシア州南西部ファンディ湾南岸、第4回（2009年）はニューブランズウィック州北東部で現在のアカディア文化の中心地であるアカディア半島、第5回（2014年）は上述のようにニューブランズウィック州北西部のエドマンズトンを中心にアメリカ合衆国メイン州北部とケベック州テミスクアータ地方でそれぞれ開催された。そして第6回（2019年）がニューブランズウィック州南東部に加え、プリンスエドワードアイランド州も開催地となったことで、アカディアンの居住する沿海諸州（ニューブランズウィック州、ノヴァスコシア州、プリンスエドワードアイランド州）における彼らの主な居住地域を一巡することになった。

世界アカディアン会議はカナダの沿海諸州に居住するフランス語話者によるローカルなイベントであるが、第1回には当時のブトロス・ガリ国際連合事務局長が参加し、その後も期間中の重要行事にカナダ首相や開催地域の首脳が出席するのが恒例となっている。2019年に開催された第6回も、アカディアンの祝日である聖母被昇天の日（8月15日）のイベントには、カナダ首相ジャスティン・トルドー、カナダ総督ジュリー・パイエット（当時）のほか、開催地域であるニューブランズウィック州首相、プリンスエドワードアイランド州首相、自身がアカディアンでもある同州副総督などが勢揃いした（写真1）。当時のニューブランズウィック州副総督もアカディアン女性であったが、開催直前に病気のため逝去し、同州副総督は空位であった。ニューブランズウィック州首相とプリンスエドワードアイランド州首相は英語を母語としており、アカディアンではなく、フランス語も堪能ではないので、実質的に英語のみで演説した。カナダ首相とカナダ総督は、カナダが英語とフランス語を公用語とする国家であることを反映して、近年では母語にかかわらず二言語話者であることが求められているが、このときは両者とも出身地こそ異なるもののフランス語の母語話者であった。

世界アカディアン会議は、その名のとおり、アカディアン社会のさまざまな課題を議論する会議が期間内にいくつも設定され、それには域内外の識者だけでなく一般の人も参加し、また大学生をはじめとする若者の勉強会のような性格のものもみられる。ただ、それだけにとどまらず、期間内にはさまざまなイベントが開催される。なかでも、特徴的なのが一族集会である。アカディアンの祖先は17世紀初頭に現在のノヴァスコシア州ファンディ湾沿岸に入植したフランス人であり、1713年のユトレヒト条約でイギリスの支配下に置かれ、さらに1755年にはイギリス植民地当局から強制追放されるという憂き目にもあった。現在のアカディアンはニューブランズウィック州の沿海部を中心に居住しており、少数の家族から発展したために姓に特徴がみられる。代表的なのはルブラン（LeBlanc）などであり、同じフランス系カナダであるケベック州に多い姓とは異なる姓が上位をしめる。また、沿海諸州においても地域ごとに特徴がみられ、かつてはそれぞれの居住地域が空間的に孤立し、同じアカディアンであっても人々の交流が限定的であったことが示唆される。アカディアンは18世紀にイギリスの支配下に入って以降ディアスポラを経験し、その結果として子孫が北アメリカ各地に散らばって存在している。一族集会は姓を同じくする人々が一堂に会する機会であり、一族集会に参加することも世界アカディアン会議に参加する目的のひとつとなっている。カナダの周辺地域である沿海諸州は人口規模が小さく、北アメリカ各地からアカディアンの子孫が集まる世界アカディアン会議の経済効果は非常に大きい。

近年の世界アカディアン会議



写真1 第6回世界アカディアン会議のメインイベントにそろった要人（ニューブランズウィック州モンクトン都市圏，2019年8月15日，報告者撮影）

にみられる特徴のひとつは、地域を展示する役割である。第5回(2014年)は内陸部の林業のさかんな地域で開催され、ほかのアカディアン居住地域が沿海部に位置し、伝統的に水産業とのつながりが深いなかで、「大地と森のアカディア」であることが強調された。期間中に開催されたイベントでも、メイン大学フォートケント校アカディアン・アーカイヴスで地域のアカディアンの歴史に関する講演や、ソバを原料とするクレープである郷土料理プロイヤーに関するイベントがみられた。第6回(2019年)はアカディアンのアイデンティティ象徴体系を整備した第2回アカディアン・ナショナル会議(1884年)の開催地であるプリンスエドワードアイランド州で開催され、それにちなんだイベントがみられた。また、第2回アカディアン・ナショナル会議ではアカディアンの頌歌として賛美歌アヴェ・マリス・ステラが選ばれたが、詞はラテン語であった。それに代わってフランス語の詞がつけられたのが第1回世界アカディアン会議(1994年)のときであり、その作者はプリンスエドワードアイランド州在住の地元ジャーナリストであったので、それも強調された。これらのイベントは、北アメリカ各地から参集するアカディアンがそれぞれの地域に関する理解を深める機会になるだけでなく、最近流入したフランス語を日常的に用いる移民が、地域で継承されてきたフランス語系住民の文化に親しむ機会にもなっている。要人の演説においても、「仲間になったアカディアン」と呼びかける場面が目立ったように、少子高齢化が進むなかで最近の移民のフランス語社会への統合は不可欠かつ不可欠である。すなわち、世界アカディアン会議はアカディアンのアイデンティティの強化に加え、各地を巡回し地域を展示することによって、各地から集まるアカディアンや最近の移民が居住地域の歴史や文化に親しむ機会を提供する役割を果たしている。

なお、コロナ禍による制約のため本格的な調査は断念せざるをえなかったが、ニューブランズウィック州北西部のエドマンズトンとその周辺では新たな展開がみられた。エドマンズトンを中心とするマダワスカ地方のフランス系住民はアカディアンであるとともにブレヨンというアイデンティティも継承し、例年ブレヨン祭を開催してきたが、ブレヨン祭はコロナ禍とは別の理由で終焉を迎えた。また、前後して1913年から刊行されてきたローカル週刊紙ル・マダワスカも廃刊になった。第5回世界アカディアン会議の開催を契機に高まりをみせた、メイン州北部やケベック州テミスクアータ地方との協力関係も、コロナ禍がもたらした国境や州境の封鎖によって対面による人々の交流が難しくなり、機運はしぼんだように見える。この地域のアカディアン社会への統合が加速したのか否かは今後の研究の進展を待つ必要があるが、本研究課題を構想した時期とは大きく状況が変化した。ケベック州においても、2020年代に入って州政府のフランス語保護政策が強化される方向に進み、党首の人気と現政権与党の失速を背景に独立派政党が支持を回復しつつある。こうした動きは伝統的にケベコワとはみなされてこなかった人々のアイデンティティに影響を与える可能性がある。現地の状況がめまぐるしく変化するなかで、それを注視しつつ、本研究課題の期間に解明に至らなかった点については今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 大石 太郎	4. 巻 77
2. 論文標題 フランス語憲章下のケベック州モンリオールにおける英語話者の言語使用とアイデンティティ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学芸地理	6. 最初と最後の頁 30-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大石 太郎	4. 巻 66(7)
2. 論文標題 カナダ都市における非公用語話者の居住分布 国勢調査からみるカナダの多様性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地理	6. 最初と最後の頁 32-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大石 太郎	4. 巻 13
2. 論文標題 カナダ、沿海諸州におけるアカディアンの文化遺産を活用した地域活性化 ノートルダム・ドゥ・ラソンプション大聖堂の史跡指定を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地理空間	6. 最初と最後の頁 161-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24586/jags.13.3_161	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大石 太郎	4. 巻 39
2. 論文標題 首都オタワのカナダ・デーの特徴と新たな動向	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 カナダ研究年報	6. 最初と最後の頁 77-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大石 太郎	4. 巻 9(1)
2. 論文標題 カナダにおけるフランス語話者人口の地域的特徴 フランコ・オンタリアンを中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際学研究	6. 最初と最後の頁 73-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大石 太郎
2. 発表標題 ケベックにおける産業の発展と産業博物館
3. 学会等名 日本ケベック学会研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大石 太郎
2. 発表標題 カナダ, 沿海諸州におけるエスニック・イベントの地域に果たす役割 世界アカディアン会議の観察から
3. 学会等名 (公社)日本地理学会春季学術大会(エスニック地理学研究グループ研究集会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大石 太郎
2. 発表標題 カナダにおける国指定史跡とエスニック集団の歴史的遺産を活用した地域活性化の試み 沿海諸州のフランス語系少数集団アカディアンの事例
3. 学会等名 第13回地理空間学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大石太郎
2. 発表標題 カナダ, ケベック州における多文化共生 現状と解決モデルの模索
3. 学会等名 (一社)人文地理学会第133回地理思想研究部会・第47回地理教育研究部会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大石太郎
2. 発表標題 カナダ, 沿海諸州におけるフランス系住民アカディアンの記憶と継承 世界アカディアン会議を中心に
3. 学会等名 (公社)日本地理学会春季学術大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 日本ケベック学会編 (編集委員: 矢頭典枝, 大石太郎, 飯笹佐代子, 古地順一郎, 真田桂子, 近藤野里, 神崎舞, 廣松勲)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 368
3. 書名 ケベックを知るための56章 (第2版)	

1. 著者名 日本地理学会編 (大石太郎ほか執筆)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 818
3. 書名 地理学事典	

1. 著者名 横山智・湖中真哉・由井義通・綾部真雄・森本泉・三尾裕子編（大石太郎ほか執筆）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 136
3. 書名 フィールドから地球を学ぶ 地理授業のための60のエピソード	

1. 著者名 漆原和子・藤塚吉浩・松山洋・大西宏治編（大石太郎ほか執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 219
3. 書名 図説世界の地域問題100	

1. 著者名 水戸考道・大石太郎・大岡栄美編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 関西学院大学出版会	5. 総ページ数 201
3. 書名 総合研究カナダ	

1. 著者名 飯野正子・竹中豊総監修，日本カナダ学会編（編集委員：佐藤信行，矢頭典枝，田中俊弘，大石太郎）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 380
3. 書名 現代カナダを知るための60章（第2版）	

1. 著者名 菊地俊夫編（大石太郎ほか執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 二宮書店	5. 総ページ数 151
3. 書名 地の理の学び方 地域のさまざまな見方・考え方	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------